

# 北海道のオープンガーデン



バラ中心のガーデン。すばらしい香り。(和田邸)

**「ガーデナーの交流の場、オープンガーデン」**  
 私は札幌から40kmほど離れた月形町という人口4,000人ほどの田舎町で、生産直販の「ノージガーデン」というガーデンショップを経営しています。「ノージガーデン」は趣味から始まった店のため、品揃えもかなりマアックで、ただ花を買い求めるだけではない、様々なガーデナー(園芸愛好家)がやってきます。植物好きで個性的なガーデナーはその

多くがリピッターであり、自分の庭に植え込む植物をじっくり探したあと、多くの人が言います。「いまが花の盛り。一度見にきて…」と。花自慢、庭自慢は1人2人ではなく、実にハフエテに富み、大勢います。

多くのガーデナーは実は自分のためだけではなく、周りの人とその穏やかな時間を共有し、性別、年齢、職業などすべてを取り払って、好きな庭談義、花談義をしたいのだなと感じずにはいられませぬ。いつしか、こんなガーデナー達を満足させるには、オープンガーデンしかないと考え、オープンガーデンのきっかけを探すようになつていった私でした。

そんな思いが煮詰まってきた頃、北海道各地で花に関する活動がそれぞれ進んだが、スタンスで続けている2人の女性に出会いました。「北海道で私たちは何ができるだろう。1人じゃできないけど、3人なら何かできるよね」と話がまとまり、2000年12月、『ブレインズ 種まく私たち』というグループを立ち上げました。3人が美しい花の島、ガーデングアイランド北海道」を目指しているのは同じだったのです。早速、私は英国式 オープンガーデンの案内本を発行しようとして提案しました。

## イギリス発祥のオープンガーデン

オープンガーデンとは、英国から始まった個人の庭を一般に公開するといつ取組みです。その表紙の色から通称『インローブック』と呼ばれる案内本が毎年慈善団体ナショナルガーデンスキームより発行されています。非常に厳しい審査に合格した庭主しか掲載されないのです。庭主にとって掲載されることはとても名誉なことです。また、英国のオープンガーデンは入場料(約2ポンド程度)を徴収し、そこから得た収益は福祉や自然保護に寄付され、チャリティ活動も兼ねています。公開は数日の期間限定のもの

が多く、庭が一番美しい時に限られています。今では英国の夏の風物詩ともいえるくらい

の人気になり、ヨーロッパをはじめ、ニュージーランド、オーストラリアなどにも広がっています。

もちろん、日本各地でも少しずつオープンガーデンは始まっています。しかし、そのスタイルは様々です。都府県ではツアー形式、会員制で行っているところもほとんどです。また公開日についても数日や数ヶ月から通年のところまで様々です。

## 『Open Garden of Hokkaido 2001』発行

ブレインズでオープンガーデンの案内本を出そうと提案したのは2001年1月。それからの動きは周囲も驚く早さでした。発行予定は5月。そこから逆算して、募集、審査、編集、発行…。出版無知の私たちは周囲の助けもあり、何とか5月には第1号を出すことができました。収録した庭の数は70軒、主に道央圏(特に石狩・空知地域)に集中していますが、全道に広がっています。資金はどうしましたか?とよく聞かれますが、実はゼロ。補助金や広告料でも考えてみましたが、それでは遅すぎるのです。すべて見切り発車で、走りながらの軌道修正。仕事との掛け持ちでかなり無理をした素人編集でしたが、発行してからは様々な媒体で紹介され、予定の3,000部を夏には完売。大きな反響を呼び、それは次第に道内から道外へと広がっていきました。



オープンガーデンをしているお宅で。(田中邸)



旭川の上野ガーデン。広いガーデン、すべて手づくり。(上野邸)



「コテージガーデン」では毎年、ハンギングバスケット展をしている。オープンガーデンも…。大勢人がやってくる。

また、この2001年は、北海道で発行されている花の雑誌がオープンガーデン特集を組んだり、石狩支庁がNPO団体と協働して作ったオープンガーデン情報誌「花」(北海道 石狩地域編)が発行された年でもあり、北海道のオープンガーデン元年と語っている年になりました。

### 北海道のオープンガーデン事情

私たちが提唱しているオープンガーデンにはいくつか他で行われているものとは違う点があります。まず第1に、見学方法について、北海道ではブレインズの一人である内倉真裕氏が仕掛けた全国的にも有名な恵庭市恵み野での、道路から見るオープンガーデンのような取組みが主体になっていました。しかし、ブレインズのオープンガーデンは、個人が個人の責任で庭を訪問する、という考えを基に公開をそれぞれ個人の責任において実施してもらい、この案内本には各庭のオープン日時を明記してもらって「公開日指定方式」としています。

第2に、会員限定ではなく、広く一般の方が公開している庭を訪問し易い情報を入手できるように案内本を発行しています。

これらのことを続けるためには、訪問者、庭主双方のマナーが必要です。当然のことながら、公開しているのは個人宅の庭です。その方のご厚意で公開していただいているので、訪問者は庭主のご近所の迷惑になるようなこと(例えば大声で話す、車のエンジンの掛け放しや迷惑駐車など)や、「この花を分けて欲しい」とお願いしないことなど、厳しい制約を設け、テレビやラジオで紹介する時には「マナー」についてもキッチリと書いてもらうことを条件にしました。

また、庭主も大勢の方が訪れることを予想して「近所などへの配慮も必要です。」

### オープンガーデンしてみたら…

最初はトラブル発生を心配しながらのオープンガーデンでしたが、1シーズンを終えてみると大きなトラブルもなく、公開した人にも訪問した人にも好評のうちを終了することができ、ほとんどのメンバーだったのです。

それぞれの庭は想像以上に素晴らしく、手間を惜みず、よく手入れされた庭ばかり。一年草中心だったり、宿根草中心だったり、コンテナ中心だったり、バブ中心だったり、テーブルやイスから小物まですべて手作りだったり、夫婦の合作だったり、花もお互いに交換し合うたり、自分で種まきしたりと、いろいろなパターンがあります。

また、オープンガーデンに参加している年齢層は比較的高く、子育てが終わり、時間や金銭的に余裕ができた世代が圧倒的のようです。もちろん、夫婦ともども楽しんでいるガーデンが美に多いのです。

「延べ400人も来た」「教わる事が多くて勉強になった」「いろんな人と知り合いになれた」「大勢の人が訪れるのでバリエーションが豊富で、大勢の感想です。さらに訪問して歩いた人からは、参考になつた」「素晴らしい庭に感動した」「夫婦でガーデンが

なんてつらやまなりたい」「私も参加したい」「等々多くの反応がありました。もちろん、苦情も少数ではあります

が、当然聞かえてきました。宿根草の庭なのに「なーんだ、花が全然ないね」



こんなふうにオープンガーデンを楽しんでいる。(田中邸)

と言われた。訪問日を守らない。勝手に入ってくる。勝手に戸を開けられたなど。

### オープンガーデンとグリーンツーリズム

私たちブレインズは今年も第2号を発刊しました。去年の反省を踏まえ、オールカプラー4,000部。公開日指定なので、本の有効はその年限りになります。相変わらずの素人発行は苦勞の連続で、販売部数も伸び止まっていますが、毎年出すことに意味があるという考えには変わりありません。今後最大の課題は、いかにいい庭を集めることができるかということです。また、誰もが楽しめるようにするために、マナーの向上や本の発行に係る資金繰りなど、多くの課題があるのも事実です。

北海道のオープンガーデンは、グリーンツーリズムに通じ、重なる部分がかなりあります。それは地方の方がオープンしやすいという事情から来ています。元々オープンな地方では、駐車の問題なども軽くクリアでき、近所にもこうした取組みが周知されている場合が多いのです。

北海道は自然の恵み豊かな美しい島です。自然の景観、農村景観、さらに個人の庭、商店街など、どこへ行っても途切れることのない緑と花の美しい島が実現した時、世界中から入客がやってくるに違いありません。これはまさしく、個人個人のグリーンツーリズムになるのではないのでしょうか。日本だけでなく世界中の人たちとオープンガーデンがきっかけで交流できる。そんな素敵なこのきっかけになればと、私たちは第3号に向けて行動をはじめています。

『ブレインズ 種まく私たち』事務局

梅木あゆみ